

舞田敏彦著

『データで読む 教育の論点』

(晶文社、2017年)

浜島幸司

<書評の目的>

評者は学会誌に書評を掲載する意味とは何か考えてみた。以下の2つだと判断した。

①所属学会員の研究成果を同じ会員として批評する。これはお互いの研究をよりよくすることにつながるだろう。会員相互のやりとりを開示することで学会内での研究知の蓄積を確認し、新たな課題へ挑戦する機会につながりうる。

②読み手である会員に対して対象図書の内容を紹介し、有益(であろう)情報を共有する。「子ども社会」に関心をもつ者として対象図書から何を学ぶことができるのか評者の見解を示す。ひとりでも多くの読者に対象図書および関連領域に関心を持ってもらうことを目指す。会員全体の利益向上のために対象図書に備わった知を共有したい。

以上を踏まえて、本書を評する。

<著者について>

著者は個人のブログ(「データえっせい」(<http://tmaita77.blogspot.jp/>))および「つぶやき」(<https://twitter.com/tmaita77>)を展開している。本書に含まれる内容もブログで既出のものである(ブログおよびつぶやきは子ども社会に関する研究、分析だけではなく、著者の日常にも触れられているため、閲覧時には留意しておいたほうがよいだろう)。

ブログの「履歴等」を確認したところ(2018年2月12日アクセス)、「所属学会」に本学会は記載されていない(日本教育社会学会・日本社会病理学会・日本教育学会の会員であることが確認できる)。残念ながら会員ではないようだ。し

たがって、上記にあげた書評の意味①はおこなわずに、②に専念することにする。

<内容紹介>

本書の特徴は筆者がブログ（2010年12月に開設）にコツコツと掲載した各種調査（厚生労働省・総務省・文部科学省およびPISA（OECDの学習到達度調査）、WVS（世界価値観調査）といった国際調査（以上、本書の紹介文より）などの個票および集計値を用いた統計データ解析（計量分析）である。このことで著者が専門とする「日本の教育の病理」を浮き立たせるというものだ。データも出版にあわせ改訂してある。

本書は子ども（学力／逸脱）、家庭（家庭環境／保育／受験）、学校（教育機会／教育課程／進路／教員）、若者（就労／結婚／意識）、社会（学歴社会／格差社会）から構成されており、子ども社会に関連のあるものがほとんどいい。各章で示される内容は著者が用意した問題に対してとりまとめた図表と説明が加えられている。読者の関心に合わせてどこからでも読めるという設計になっている。

<有益（であろう）情報>

本学会会員であれば2010年代の子ども社会をとりまく環境を知る上でも一読しておいてよい著作である。とりわけ本書から学べる点としては子どもをめぐる国内・国外比較、時点別比較が各種調査結果をもとに示されていることである。結果も難解な多変量解析（一部、重回帰分析は使用されているが）を避けて、わかりやすくまとめようと努力している。

また、著者が関わった調査ではなく、公的機関もしくは別団体が実施した調査結果の2次利用（一部は個票を借りた再分析もある）から独自の図表を用意している。種類にもよるが調査には多大な時間と費用がかかる。貴重なデータにもかかわらず簡単な報告で済ませてそのままお蔵入りしてしまったり、関係者のみしか利用できなかったりするのは社会的にみてもマイナスである。それを本書のように利活用することは社会調査の有効利用の側面からみても意味があると評価できる。

もちろん、本書の結果を鵜呑みにしてはいけない。本書はデータをそのまま示したのではない。著者が問いを立てて「意図」を含んだ分析をおこなったうえで図表にしている。限られたデータからの因果関係、相関関係、推測が示された書籍である。このことは著者も十分理解しており、むしろ読み手の理解の仕方（データリテラシー）が問われる。本書に「答え」があるのではない。本書から読者自身の「問い」が形成される。そういう書籍なのだと評者は解釈する。

その意味で本書は子ども社会の現状を知るための読み物としてだけではなく、データリテラシーを養成する大学・専門学校などでの担当科目のサブ・テキストとして援用できるであろう。また、調査データ分析や情報活用等の演習および課題を考える際にも参考となるであろう。公表された調査データを2次利用して図表を作成するときのアイデアがふんだんに用意されている。

<おわりに>

評者は「子ども社会」を解明するために何らかのデータを収集し、まとめて、知見を報告するスタイルをよく用いている。本書から子どもを取り巻くデータとは何だろうかと改めて気づかされた。これまでに実施された調査から利活用できるものもあれば、新規に独自性のあるデータを取得する必要もある。データそれだけでは何も面白味もないし研究の蓄積にも貢献できない。理論・分析枠組み・結果の解釈と連動してこそデータが生きてくる。データにこだわることは子ども社会への研究全体に大きく関わっていく。量的・質的にかかわらず、また過去・現在にかかわらず、多彩なデータを用いた子ども社会への研究が盛んになっていくことを望む。

ブログや SNS で自分の研究を公表する時代がもはや当たり前になってきた。元会長である武内清会員も 2007 年 12 月より開設しており (<http://www.takeuchikiyoshi.com>) (2018 年 2 月 12 日アクセス)、ここでの記事をもとに書籍(『学生文化・生徒文化の社会学』ハーベスト社、2014 年)や大学紀要(「学生、大学教育、学問他について」『敬愛大学 国際研究』30 号)へと発展させている。氏の独自の語り口に固定ファンもいると聞く。評者も匿名でまれに登場し、こういう書かれ方をするのだと驚いたことがある。(話はそれだが)個人がメディアを持ち、瞬時にかつ自由に発信する環境が整っている。情報の受け手も多様

化している。批評空間は学会内部を超えて世界的な広がりを見せている。評者はただ情報が広がればいいとは思わないが。この状況を見据えれば、私見ではあるが学会内部、学会誌を通じた研究知の蓄積、書評を含めた会員間相互の知の共有および批評の意義など、当学会の独自性をより明確に示す時期にきているのではないかと思う（そうしないと本会員は増えないし、在籍のメリットがなければ退会者も増えるとの危惧がある）。

ともあれ、本書は 2010 年代の日本の子ども社会を知る手がかりをデータという形で提示している。さまざまな論点を提起していることは間違いない。